

3.1 構成を考える Organization of an Academic Essay

■序論・本論・結論

レポートの文章は、以下のように、序論・本論・結論という構成をとることが多い。論理的なレポートを作成するには、どこに何を書くべきかを理解し、全体構成を意識することが重要である。

序論：レポートの話題を導入し、「問い」を示す部分

なぜその話題が重要なのか、興味深いのが伝わるよう、基本的な背景情報を提示する【話題の提示・背景情報】。徐々に焦点を絞り、レポートの問いとして具体的に何を論じるかを示す【問い】。問いだけでなく「答え」も序論に簡潔に書いたり、レポート構成の予告（どのような順番で論じるか）を示したりする場合もある。

本論：問いについて、自分の主張を詳しく論じる部分

問いに関する主張と、それを支える根拠を示して、議論を展開する【問いに関する主張と根拠】。本論はレポート全体の中で一番長くなり、複数の章や節（章の下位の区切り）に分けることが多い。

結論：問いに対して答える部分

本論で議論したことをまとめ【本論のまとめ】、序論で提示した問いに対し、答えを示す【答え】。レポートの最後に、今後の課題（そのレポートの不足点とこれから取り組むべき点）を述べることもある。

以上が一般的に各部分に含まれる内容だが、レポートのタイプや専門分野によって違いがある。理系の実験レポートについては、前書きで紹介した「自然科学総合実験」のテキストを参照してほしい。実験レポート以外のものについては、本書の参考文献として挙げた『留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック』に、様々な構成の例が記載されている。レポート例を複数見て、自分のレポート課題に最も適した構成がどのようなものか、検討するとよい。

■レポートの問いと答えを考える

例えば、「大学生に対する学習支援の必要性について、考えを述べよ」という課題が与えられたとする。構成を考えるためにまず行うのは、問いと答えを考えることである。

図3-1は、サンプルレポート（学習支援センターウェブサイトに掲載）での検討例である。日本学生支援機構の調査結果や稲垣・波多野の『人はいかに学ぶか』などの文献から得た情報と、自分の経験とを照らし合わせながら、レポートの内容を構想している。

[論点を絞る]

学習支援といっても色々あって、全部を扱うのは難しい。私にとって一番理解しやすいのは、*SLAからの支援だ。これに絞れば論じやすい。

*SLA：学習支援センターで学習支援を行う学生スタッフ

[問いを考える]

調査結果を見ると、SLAのような制度は多くの大学に導入されている。つまり、必要性は広く認識されているということだ。でも、それはなぜだろう。レポートの問いは「大学生に対して先輩学生が学習支援を行う意義は何か」にしよう。

[答えを考える]

『人はいかに学ぶか』には、最良の学習環境は他者だとある。この主張に基づいて、SLAのような他者からの学習支援を、学習環境の一部とみなすと、意義が説明できるはずだ。



図3-1 問いと答えの検討例

コラム5：新聞の社説

文章力をつけるためにと、新聞の社説を読むよう勧められたことがあるかもしれない。社会的な出来事を理解したり、時事用語を学んだりするには、社説は有用である。だが、社説の文章と大学のレポートで求められる文章とは、大きく異なる点に注意が必要である。社説は序論・本論・結論という構成でないことも多く、体言止めも多用される。改行も頻繁に行われ、パラグラフ [3.3 参照] の形式をとらない場合が多い。社説はアカデミックなレポートとは、全く別のタイプの文章と心得るべきだ。

3.2 アウトラインを作成する Writing an Outline

■アウトラインの作成

「3.1 構成を考える」では、レポートの「問い」と「答え」を検討した。続いて、全体のアウトラインを作成し、構成のしっかりしたレポートを目指す。アウトラインとは、文章の内容を箇条書きや短い文で示したものである。表 3-1 は、ほぼ完成レポートに対応した詳しいアウトラインだが、まずは簡単なメモ書きを作ってみよう。

以下の 1)~5)は、アウトライン作成の作業例である。必ずしもこの順に進めなくてもかまわない。行きつ戻りつしながら、徐々に詳細を決定する。

- 1) 序論に問いを、結論に答えを書く。仮のタイトルも考える。
- 2) 本論に、答えにつながる根拠を書く。内容のまとまりをもとに区切りを考えて、仮の見出しもつけておく。
*以下、細部を考える作業では、どの参考文献をどこで使用するかも記す。
参考文献の表現をそのまま使用する場合（直接引用の場合）は、「 」とページも書いておく。
- 3) 序論の書き出しを考える。問いがどのように導き出されたのかが、読み手に伝わるように書く。
- 4) 結論に、本論の議論の要点を書き加える。問い—本論の議論—答えのつながりも検討し、必要に応じて修正する。
- 5) 内容のまとまりや各部分の長さを見ながら、章の区切りを検討する。1 つの章が他の章よりも極端に長い場合には、2 つの章に分けたり、その章の中に複数の節を立てて区切ったりして、バランスをとる。

■アウトラインからの文章化

アウトラインが固まったら、書きやすいところから文章化を進める。重要なのは、問いと答えや本論の展開がずれてしまわないよう、アウトラインを参照しながら書き進めることである。実際に文章化してみると、追加すべき情報や、主張が矛盾する部分に気づくかもしれない。その場合には、アウトラインを修正し、全体の流れを確認するとよい。

表 3-1 アウトラインの具体例

	タイトル：「大学生に対する学習支援の意義について」
序論	<p>1. はじめに</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 大学での学びは、高校までと違い、能動的な学習が必要 ・ 主体的に学ぶべき大学生に、他者が学習支援を行うのは矛盾する <p>→<u>大学生に対して、先輩学生が学習支援を行う意義は何か【問い】</u></p>
本論	<p>2. 大学における学習</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 2つの学習観 <p>{ 伝統的な学習観：「教え手がいてはじめて学べる」(稲垣・波田野 1989, p.7)</p> <p>{ 新しい学習観：「教え手から知識を伝達されなくとも、みずから知識を構成することができる」(稲垣・波田野 1989, p.19)</p> <p>→大学での学びは、新しい学習観に合致する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 能動的な学習者に、学習支援がどのような意味を持つか考えるべき <p>3. 大学における学習支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 大学では多様な学習支援が行われている <p>最近の調査では、ラーニングコモンズ等の物理的な学習環境の整備に注目している(日本学生支援機構 2014)</p> <p>→SLA のような支援も、学習環境の整備とみなせる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 稲垣・波田野(1989)：最良の学習環境は「他者」である <p>主体性を維持しながら、熟達者から効果的に学ぶことが可能</p> <p>他者は、異なる視点を提供してくれる存在</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 先輩学生の利点：大学教授よりも身近 <p>疑問や探究心が芽生えたときに対話ができる</p>
結論	<p>4. おわりに</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 能動的な学びのための学習支援は、学習環境の整備と定義できる ・ 学習環境には、物理的な設備だけでなく、他者の存在も重要 <p>→<u>先輩学生からの学習支援は、能動的に学ぶための学習環境として意義がある【答え】</u></p>
参考文献	<p>稲垣佳世子・波田野誼余夫(1989)『人はいかに学ぶか：日常的認知の世界』(中公新書, 907) 中央公論社.</p> <p>日本学生支援機構(2014)『『大学等における学生支援の取組状況に関する調査(平成25年度)』集計報告(単純集計)』 http://www.jasso.go.jp/about/statistics/torikumi_chosa/_icsFiles/afieldfile/2015/12/08/h25torikumi_chousa.pdf (閲覧 2017/01/22).</p>

(レポートの本文は、東北大学学習支援センターウェブサイトに掲載)

3.3 文章を書く Writing Sentences and Paragraphs

■レポートの文章

レポートの文章には、しゃれた言葉や凝った言い回しを使う必要はない。正確に読み手に情報を伝えることを優先して、パラグラフ（paragraph）や表現を考えることが重要である。

■パラグラフ・ライティング

英語の授業でパラグラフ・ライティングについて学習した人も多いだろう。パラグラフは、段落と訳されることも多いが、両者が指すものには違いもある。英語のパラグラフも日本語の段落も、文章のひとまとまりを意味し、冒頭で字下げをするという点は共通している。だが、パラグラフには決まった構造があるのに対し、段落は区切り方に厳密な規則がない。

以下は、パラグラフについて説明した文章である。この説明文自体が、パラグラフ・ライティングとなっている。

中心文	<u>パラグラフの基本構造は、中心文（Topic sentence）、支持文（Supporting sentence）、まとめ文（Concluding sentence）からなる。</u>
支持文	中心文は、そのパラグラフの中心となる内容を示す文である。できるだけ冒頭部分におくと、読み手が意味をつかみやすい。支持文は、中心文の内容を詳しく説明する文であり、中心文と関係のないことを入れてはいけない。まとめ文では、中心文を言い換えたり、パラグラフ全体の要旨をまとめたりする。
まとめ文	まとめ文は省略されることもある。 <u>このように、パラグラフの構造には明確な決まりがある。</u>

日本語のレポートでも、パラグラフ・ライティングを心がけると、論理的でわかりやすい文章を作成することができる。長くなったから適当なところで改行するというのではなく、内容のまとまりを考えながらパラグラフを作成することが重要だ。数ページにわたる長いレポートでも、各パラグラフに中心文があれば、読み手は難なく理解することができる。

■レポートにふさわしい表現

(1) 書き言葉を使い、文末は「だ・である」調で統一する。

x でも → ○ だが

x AとかBなんかの問題があります。 → ○ AやBなどの問題がある。

(2) !、?などの記号を使わない。

x ~だろうか? → ○ ~だろうか。

(3) 体言止めにしない。

x 文章を書く際に重要なのは、読み手意識。

→ ○ 文章を書く際に重要なのは、読み手を意識することである。

(4) 主語と述語を対応させる。

x パラグラフと段落の共通点は、冒頭で字下げをする。

→ ○ パラグラフと段落の共通点は、冒頭で字下げをすることである。

■わかりやすい表現

(1) 適切な位置に、読点(、)を打つ。「したがって」などの接続表現のあとや、意味の切れ目のあとに入れると読みやすい。

x このように信頼性の高い情報を引用することによりレポートの説得力を増すことができる。

→ ○ このように、信頼性の高い情報を引用することにより、レポートの説得力を増すことができる。

(2) 語順に留意して、何が何を修飾するのか明快にする。

x 一貫したルールで引用した情報を明示する。

→ ○ 引用した情報を、一貫したルールで明示する。

(3) 一文を短めにする。長すぎる文は、意味がわかりにくくなりやすい。

x 文章の種類によって引用の表記方法は異なり、一般書や小説などでは、参照した資料を巻末の文献リストに記載するだけの場合も多いが、論文や大学のレポートでは、文中と文献リストの両方で、出典を示す必要がある。

→ ○ 文章の種類によって引用の表記方法は異なる。一般書や小説などでは、参照した資料を巻末の文献リストに記載するだけの場合も多い。一方、論文や大学のレポートでは、文中と文献リストの両方で、出典を示す必要がある。